

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2570200374		
法人名	社会福祉法人 大樹会		
事業所名	グループホーム和楽		
所在地	滋賀県彦根市野田山町1099-1		
自己評価作成日	令和5年7月10日	評価結果市町村受理日	令和5年9月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.wam.go.jp/">http://www.wam.go.jp/</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	公益社団法人 滋賀県社会福祉士会		
所在地	草津市笠山7丁目8-138 滋賀県立長寿社会福祉センター内		
訪問調査日	令和5年8月7日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

生活の中で食事などの家事や日常の活動も含め、共に過ごす時間を大切に一緒に活動や作業を行うことで、生活をサポートしている。また、コロナ禍以降外出する機会が減ってしまったが、室内や敷地内での活動や過ごし方に工夫をしている。併設している乳児保育園とも、日常的に交流ができる機会がある。  
 個々の身体的レベルや認知症の症状の違いが大きくあるが、個々の状態に合わせてできること・したいことを見つけ、個別的なケアに努めている。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

東近江地域から湖北地域へ至る広いエリア内で地域のニーズに細かく応える経営方針で多様な高齢者福祉事業や障害者福祉事業も展開する社会福祉法人大樹会が経営母体。GH和楽は法人設立後最初に開所した施設である。法人の理念である「水平対等、双方向、地域共生」は職員の業務の組み立ての根拠とされ、新人職員の養成にも活かされている。自治会に加入し、GHの広報誌を閲覧板に入れてもらっている。重度になっても残存能力を見極め調理に参加していただくなど利用者の能力を最大限引き出されている。咀嚼・嚥下機能が低下しても、とんかつが食べたいとの利用者の希望を叶えるため職員が調理に知恵を出し合うなど本人の意思を尊重した支援が行われている。馴染みの関係性の中でも不適切ケアを防止するため、職員には定期的な法人研修を受講する機会やチェックリストで自分のケアの質を振り返る機会が確保されている。併設の乳児保育園児との交流も盛んである。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の <input type="radio"/> 2. 利用者の2/3くらい <input type="radio"/> 3. 利用者の1/3くらい <input type="radio"/> 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と <input type="radio"/> 2. 家族の2/3くらい <input type="radio"/> 3. 家族の1/3くらい <input type="radio"/> 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある <input type="radio"/> 2. 数日に1回程度ある <input type="radio"/> 3. たまにある <input type="radio"/> 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように <input type="radio"/> 2. 数日に1回程度 <input type="radio"/> 3. たまに <input type="radio"/> 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が <input type="radio"/> 2. 利用者の2/3くらい <input type="radio"/> 3. 利用者の1/3くらい <input type="radio"/> 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている <input type="radio"/> 2. 少しずつ増えている <input type="radio"/> 3. あまり増えていない <input type="radio"/> 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が <input type="radio"/> 2. 利用者の2/3くらい <input type="radio"/> 3. 利用者の1/3くらい <input type="radio"/> 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が <input type="radio"/> 2. 職員の2/3くらい <input type="radio"/> 3. 職員の1/3くらい <input type="radio"/> 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が <input type="radio"/> 2. 利用者の2/3くらい <input type="radio"/> 3. 利用者の1/3くらい <input type="radio"/> 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が <input type="radio"/> 2. 利用者の2/3くらい <input type="radio"/> 3. 利用者の1/3くらい <input type="radio"/> 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が <input type="radio"/> 2. 利用者の2/3くらい <input type="radio"/> 3. 利用者の1/3くらい <input type="radio"/> 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が <input type="radio"/> 2. 家族等の2/3くらい <input type="radio"/> 3. 家族等の1/3くらい <input type="radio"/> 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が <input type="radio"/> 2. 利用者の2/3くらい <input type="radio"/> 3. 利用者の1/3くらい <input type="radio"/> 4. ほとんどいない			

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	年度の初めに、理念の再確認を行う時間をとり、職員間で共有し実践につなげられるよう努力している。	法人の理念である「水平対等・双方向・地域共生」を年度初めに職員間で共有し、入居者との関わりの中で実践している。新規職員については、新人研修の中で浸透させている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍以降は、毎月参加していたサロンへの参加や日常の買い物などの外出をも自粛しているため、地域と交流できる機会が少ない。通信は継続して作成し、回覧板へ入れてもらい、ホーム内の様子を発信している。	コロナ禍においては、地域との交流は制限されているが、職員が隔月に作成している広報誌を地域の回覧板を利用して事業所の様子を定期的に発信している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	隔月に和楽通信を作成し、ホーム内の活動や取り組みなどを知ってもらえるように努めている。また、デイサービスと乳児保育園を併設しているため、ご希望に合わせて相談を行い、サービスの利用につなげられるようにしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍以降、書面でのやり取りを行っている。書面でのやり取りにおいても、委員の方より毎回意見や質問を頂き、その報告を行いながら、改善につなげるようにしている。7月度からは、集合開催再開予定である。	コロナ禍では感染予防優先の為、各委員には入居者の状況や活動報告を事前配布し、意見を出し合う書面開催の手法がうまく機能している。意見を反映した議事録は手渡しで届けている。7月からは対面開催になった。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議の報告書の提出や広報を配布している。またわからないことなど相談ごとがある時は、電話や窓口に訪問をして、担当者より助言を得るようにしている。	市役所の担当主管課とは、運営推進会議の報告書や広報誌を定期的に届けてたりして顔の見える関係を継続している。また、家族からの住所変更の相談等も電話や訪問での面談などで助言を受けている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人の研修会や3カ月に1度委員会を行い、意識確認を行い拘束をしないケアに努め、見直しをしている。入居者の安全確保と防犯上、居室の掃き出しドアはや玄関は施錠し、インターホンとセンサーにて対応していたが、入居者の状態に合わせて、日中においてはセンサーなどの対応を緩和し様子を見ている。委員会については、他部署との合同開催を予定している。	3ヶ月に1回、ミーティングや研修の機会を活用して身体拘束等適正委員会を開催し、身体拘束をしないケアに努めている。その内容については必ず運営推進会議で報告している。玄関の施錠については、過去に併設の保育園の窓が割られる事件や不審者情報があるため、現在も施錠を継続している。	施設周辺の治安状況が改善されれば、日中の玄関の解錠時間を増やすことを検討していただきたい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	定期的に研修を行い、チェック表なども使い、職員間で意識の確認や見直しを行い、防止に努めている。転倒などを防ぐために、入居者の方の行動を抑制するような声かけになってしまうことがないように、身体的なことだけでなく、声かけにも配慮するよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	年に1回は法人内での研修があり、学ぶ機会はあるものの、その必要性がある入居者がいないため、権利擁護について深く理解し活用するまでには、いたっていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前や退居時、改定など(料金・介護報酬)の時に、書面を提示し口頭で説明を行い、同意を書面でも頂いている。また、随時質問などにお応えし、理解して頂けるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナ禍以降、家族との交流会の中止や面会の制限により、直接要望を聞く機会は減ってしまったが、アンケート用紙を活用し、要望などを聞きプランに反映できるようにしている。入居者の方は要望をうまく伝えることが難しいが、日常会話から要望を聞き出し、それを反映できるようにしている。	アンケートを実施したり、ケアプラン説明時に、家族の意見や要望を運営やケアプランに反映させている。アンケートは食事や排泄、レクなど具体的な項目や利用者が重度化した場合の家族の意向確認なども設定し、家族がコメントしやすいよう工夫されている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のミーティングで出た課題について意見交換・検討を行っている。それを、主任を通じて総務や理事長に相談し、意見の反映ができるようにしている。現場の職員が代表者と直接話す機会はほとんどない。	職員は毎月のミーティングで意見や提案を行っている。行事のための買出し等については管理者が対応し、予算措置が伴う案件などは、必要に応じて管理者が法人本部に相談をして助言をもらっている。職員から浴室内に手すりが必要との意見があったので、昨年設置されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年度末に人事考課を行い、賞与や昇給に反映できるよう努めている。休みも希望に添う形で勤務を組んでいる。有休消化については、定期的に消化できるよう努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年間計画を立てて、法人研修(ネット・リモートの活用)・ホーム内の勉強会をに行い、職員の意識向上に努めている。外部の研修については、職員の欠員により、参加する機会が減ったが、リモートを活用して、できる限り参加するようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍以降、彦愛犬の研修会や部会も中止が続いていた時期もあり、交流が減った。わからないことや教えてほしいことなどがある時は、他の事業所に連絡を取り、相談や助言をもらっている。また、福祉用具についても、適宜相談している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	この2年以上入退居はない。入居の際は事前調査を行い、本人・家族や担当ケアマネジャーから情報を得ている。入居前にミーティングにて職員間での情報の共有を行い、入居後の関係が築きやすいように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居の相談の時や、入居までに見学に来てもらったり、在宅への訪問を行い、情報収集をし関係づくりに努めている。また入居後も、在宅での過ごし方や支援などについて話を聞いたりとして、支援につなげられるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	グループホームにおける支援の目的も伝え、家族や在宅時のケアマネジャーから情報を収集し、支援の相談をしたりとし、サービスをうまく活用できるよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一緒に過ごすことを目的とし、1日の中でできることを検討し、家事(食事・洗濯等)なども一緒に行える機会を持つようにしている。また、梅干しやおはぎづくりなど季節ごとでも作り方を教えてもらい、関係を築けるようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍以降面会の制限があったため、家族との連絡も電話での対応が主になっていた。毎月、お手紙と写真を送ることで、様子を伝えられるようにしている。また、入居者自身もお手紙(暑中見舞いや年賀状など)を書いたり、贈り物が届いたらお礼の電話をするようにし、関係が継続できるように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	手紙や年賀状・暑中お見舞いなどを一緒に書き、会うことができなくても関係性が保てるように努めている。書くことが難しくなってきた方が多いため、スタンプやシールを選んでハガキをデザインしてもらい、代筆したりとして支援している。お返事が来た時は、返事を出したり電話をつないだりとして、関係が継続できるよう支援している。	コロナ禍や入居者の高齢化もあって、従来のような関わりは難しいが、年賀状や暑中見舞いを活用して関係性が継続できるように支援をしている。しかし、年々書くことが難しくなっているので、スタンプやシールを活用して作成しやすいようにしている。宛名書きは職員が代筆している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	一人一人の個性と、入居者間の関係性を把握し、席の配置や作業をする場所などを配慮し、トラブルやストレスが双方に生じないように努めている。入居者間で話が伝わりやすいよう仲介に入り、かかわりが円滑になるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入居期間が長く、看取りをさせていただいた方もある。退居されてからもその家族様には、年賀状を送ったりとして、関係をすべて断ち切ることをないように努めている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	認知症の進行に伴い、思いなどをうまく伝えることができない方が増えてきたが、日常の会話やケアにあたる中で、その表情やしぐさなどから思いや希望に気づけるように努めている。職員の欠員が続き、ゆっくりと話を聞くことができないこともある。	入居者の思いや意向の把握が年々難しくなってきた為、非言語的コミュニケーションの方法を工夫している。例えば、嬉しそうか嫌そうかで思いを汲み取ったり、コーヒーかお茶を選択してもらうため絵柄付きのプレートを使用したり、筆談で対応したりしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族からも昔の話を聞き、情報共有をし現在の生活に取り入れられるよう努めている。また、新しく得られた情報は、申し送りや記録・ケアカンファレンスにて職員間で共有し、支援につなげられるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	身体的なものだけでなく、心身の状態について記録し、申し送りにて職員間で共有するようにしている。また、口頭でも職員間でやり取りを行い、詳細の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアカンファレンスにて話し合い、具体的なケア内容を決めている。コロナ禍以降は、介護計画も書面でのやり取りであったが、アンケート用紙を活用し、家族の希望などを聞き、介護計画に反映できるように努めていた。6月以降は、家族と対面でのやり取りを再開している。	3ヶ月ごとにカンファレンスを実施し、計画作成担当者が原案を作成している。カンファレンスの中で改善された課題を削除し、新しい課題を追加している。ケアプラン作成用に特化したアンケートを家族に配布し、家族からの意見や要望を聞いて計画に反映させている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録のみならず、気づきの共有ノートも活用し、気づきの共有にも努めている。また、定期的なカンファレンスだけでなく、検討すべき課題が生じた時は、臨時カンファレンスを開いて話し合い、ケア内容の見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	状態の変化に合わせ、特養などへの転居の希望など確認・相談を適宜行っている。 往診以外において病院への付き添いや、介護保険証の更新申請なども、状況に応じ代行している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	併設のデイサービス・保育園と合同避難訓練において、消防署の協力を得て指導を頂いている。コロナ禍以前は、毎月地域のサロンにも、参加させてもらっていたが、コロナ禍以降外出を自粛しており、地域へ出かける機会が減ってしまい再開できていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	月2回往診に来てもらい、状態に応じて24時間体制で特変時など主治医と連絡を取り、報告・相談をしている。歯科受診についても、3ヶ月に一度往診に来てもらっている。 家族には受診の報告を行い、希望に添えるように努めている。	月2回金曜日に協力医の往診があり、24時間連携可能である為、入居者全員の主治医となっている。専門科の受診についても主治医の紹介により通院に繋げている。受診内容については家族に随時に報告している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設のデイサービスの看護師に、相談したいことがある時は、報告し応対してもらっている。しかし日常においては、入居者と毎日かかわりが無いため、詳しい状態の把握をしてもらうことは難しい。主治医を通じて、訪問看護の協力を得ることはできる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時はMSWと連絡をとり、入院中の情報を得るようにしている。コロナ禍以降、面会などは禁止であったため、病院と家族と職員との電話連絡をこまめに行い情報交換をし、退院後の受け入れの体制を整えている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	現在看取りの方はおられないが、看取りの指針をもとに、取り組めるようにはしている。身体的レベルの低下や認知症の進行がみられる方もあり、変化に応じて家族に報告などは行っている。しかし、状態に応じて早い段階から、今後についての相談が細目にはできてはいない。年に一度、意向の確認アンケートを行ってはいる。	入居時には看取りの指針により説明し、看取りの状態になった場合には主治医から説明を行っている。現在看取りの対象者はいないが、過去には経験している。年1回の家族アンケートで、車椅子や寝たきり生活になった場合の意向確認をしているが、看取りを希望する家族が多い。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	法人研修などにより、定期的に再確認を行っている。救急講習については、職員全員一度は受講しているが、再受講がこの数年できていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練を年2回(夜間想定と正風園合同)で行い、消防署の協力も得て指導を受けている。地域の方へは運営推進会議や自治会長を通して協力を求め、理解を得るようにしている。 火災以外を想定した避難訓練を行うことができていない。	年2回、6月はGH単独で夜間想定訓練、11月は併設事業所と合同訓練を実施している。避難に車椅子を利用すべき人の居室前には、車いすマークを掲示。緊急避難時には布団に乗せて運ぶ、夜勤職員には電話やマスターキーを常時携帯する等訓練から得た貴重な経験を活かしている。	災害については、火災以外にも地震や水害等多様な災害の発生が想定されるため、今後は火災以外を想定した災害訓練の実施を期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	身体拘束等適正化委員会において、不適切ケアを考える機会を設け、声かけなどを見直し、個々を尊重できる声かけ・対応に心がけている。業務に負われてしまい、配慮に欠けてしまうことがないよう努めている。	3ヶ月毎の身体拘束等適正委員会で内部研修や「虐待の芽チェックリスト」により業務の振返りを行い、職員間で分析している。また、法人主催のWEB研修を全員が受講し、報告書の提出が義務付けられている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	お茶のメニュー(写真付き)やおやつ、誕生日に食べたもの、行事の時に景品を選ぶなど、自身で選んでもらえる機会を作っている。また、日常会話の中でも、思いが聞けるよう(聞き出せるよう)努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員の欠員が続き、業務的に1日が流れてしまい職員のペースになりがちであるが、1日の中で時間を見つけて、少しでもペースを大切にもらえるよう努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	コロナ禍以降外出する機会が減り、お化粧品をする機会も減ってしまったが、季節の合わせた服を選び、日常的な整髪・清潔を保つなど、身だしなみには気をつけ支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	個々のできることを把握し、食材の下準備や盛り付け・お茶入れなど、それぞれの役割を見出し、一緒に行うようにしている。誕生日の行事などに、好きなもの(食べたいもの)を尋ねてメニューに取り入れ、楽しみにつなげられるようにしている。	献立は法人内の栄養士が作成し、調理はその日の職員が行う(昼はクックチル)。重度化により調理に参加出来る利用者が限られてきたが、お茶を入れたり、おしぼりを巻くことや手で食材をほぐすなど出来ることを見出し、参加する人が偏らないよう配慮している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	お粥や刻み・ミキサー食など、状態に合わせて食事形態を変え提供している。また、量についても個々に配慮している。水分については一度に摂取することが難しいため、活動の合間にも提供し、摂れるようにしている。食事と水分の摂取量は記録して、職員の間で共有している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、声かけや介助にて口腔ケアを実施している。定期的に歯科往診にきてもらい、口腔内の状態の把握に努め、助言も得ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の状態に合わせたパットの形態・介助方法を行い、定期的に見直しを行い支援している。また一人一人のトイレの間隔も見ながら、トイレ誘導・介助を行っている。	1名は布パンツで自立。8名はリハビリパンツとパット使用。個々の排泄パターンによりトイレ誘導している。声掛けだけの人には必要以上の介助はしていない。排泄チェック表があり、便の質、量などを記号化して表記している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	朝食に飲むヨーグルトをつけたり、乳製品を献立に取り入れ予防に努めている。毎日、ラジオ体操やリズム体操などの機会も設けて身体を動かす機会を作るようにしている。便秘がひどい方は、主治医に相談して緩下剤などの指示をもらっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴に対しての希望は特にないが、週2回の入浴となっており、職員の都合になっている。入浴剤を数種類用意し毎回変えたり、ゆず湯なども季節ごとに取り入れ、少しでも楽しんでもらえるよう努めている。	職員のシフトが決まった段階で週2日の入浴日が割り振られる。血圧や精神状態の変動があった場合は、適宜、入浴時間を調整している。浴槽につかれる人が5名程度で、リフト設置も支柱を設置するスペースがない。	現状は、深い浴槽の個浴のため、リフトの設置や併設施設の活用も検討されているが、重度化に対応した浴室のあり方について、職員の意見も聞きながら事業所として検討して欲しい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	空調を調整し心地よく眠れるよう、心がけている。寝具も季節に合わせて適宜交換している。希望や身体の状態に応じて、日中も居室にて休んでいただいている。昼夜逆転になってしまうことのないよう、配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	ホーム内の勉強会で、各薬の把握とその副作用について定期的に再確認している。また個々に薬の詳細を表にし、変更があれば随時明記し直し、職員間で確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	できることが少なくなってきたが、食事準備や洗濯たたみ等、個々のできることを把握し、役割として一緒に行うようにしている。またゲームや歌・作品づくりなど、ゆっくりと時間が取れない日もあるものの、時間を見つけてできるよう活動に工夫している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍以降外出は自粛しているが、ドライブのみを行ったり、敷地内にて、中庭に出て花を植えたり、野菜苗を植えたりとする機会を作っている。またベンチにて日光浴をしたり、気候の良い時はおやつを中庭で食べてたりして、外に出る機会を作っている。	コロナ禍で外出自粛が継続しているが、敷地内で楽しめるよう工夫している。プランター栽培が得意な職員が利用者に花や野菜を植えて育てる機会を提供している。木々や芝生の広場、鳥小屋など恵まれた環境にあり、隣接の保育園児の芋掘りに利用者が立会い、一緒に楽しんでいる。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を所持している方や所持を希望する方はいないが、お小遣いをお預かりしているため、必要なものや買いたいものがあつた時に、適宜購入できるように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族や友人からの電話には随時つないだり、贈り物などが届いたら電話をかけたりとしてやり取りができるよう支援している。また、年賀状や暑中見舞いなど定期的に手紙を作成し、やり取りができる機会を設けている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	家庭的な雰囲気を感じてもらえるように努め、季節に合わせて廊下の壁面や玄関の飾りを変えて、季節を感じてもらえるようにしている。また、室温計を設置し、こまめに空調を調節したり、外からの光が眩しいなどの不快にならないよう、カーテンなどで調整している。	廊下の手すりは木製で壁と同じ濃い茶色で統一され、壁と同化して落ち着いた印象。建物中央にリビングとキッチンが一直線に配置することで、利用者が活動しやすいよう広さを確保している。リビングには仏間の畳スペースがあり、1カ月に数回利用者が「おつとめ」をされる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングとダイニングの空間を活用し、それぞれの場で過ごしてもらうことで、トラブルを回避しストレスの軽減にもつなげられるように努めている。また、居室でも休んでいただけるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	安全に配慮し、居室のものの配置などは適宜検討している。また、家族写真や行事などで作成した作品・家族からの贈り物などを飾り、落ち着いて過ごせるよう努めている。	居室は全て畳部屋だが全員が介護ベット使用。布団は持ち込み。転倒が増えてきたので、その危険性が高い方にはベットに腰かけるとセンサーが鳴るようになっている。壁にさり気なく持つところが設置されている。部屋の中は一人ひとりのご家庭の様子がうかがえる思い出の品が飾られている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室前に表札をかけ、トイレの場所や使用中の有無をプレートでわかりやすく明示している。廊下や居室の角には、クッションカバーや保護クッションを貼り、安全に配慮している。また、食事のお膳にも、個々にネームプレートを明示し、席がわかるようにしている。		

## 2 目標達成計画

目標達成計画は、自己評価及び外部評価結果をもとに職員一同で次のステップへ向けて取り組む目標について話し合います。目標が一つも無かったり、逆に目標をたくさん掲げすぎて課題が焦点化できなくならないよう、事業所の現在のレベルに合わせた目標水準を考えながら、優先して取り組む具体的な計画を記入します。

【目標達成計画】					
優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	35 (13)	毎年、避難訓練を実施しているが、火災想定のみで行っているため、地震や水害時の避難(垂直避難)が実施できていない。	災害の想定を広め、水害時を想定した避難訓練を年に1回は実施する。	例年の避難訓練(夜間想定・正風園合同)の加え、水害を想定した避難訓練(2階デフロアへの避難)の計画を作成し、年に1回実施していく。	1年間
2	49 (18)	コロナ禍の間、外出の自粛が続いていたため、外に出る機会が減り、そのため家族・地域・園児(隣接乳児保育園)との交流も、減ってしまった。	日常的に外に出る機会を作り、1日の中で気分転換が図れるよう取り組み、少しずつ交流も取り戻していく。	日常においては、気候に合わせて中庭でのおやつや保育園への散歩(届出物を一緒に持っていくなども含め)・日光浴を行っていく。また、地域へのいこいサロンも、小人数からの参加を再開する。但し、感染状況をみながら判断し取り組んでいく。	6ヶ月
3					
4					
5					

注)項目の欄については、自己評価項目のNo.を記入して下さい。項目数が足りない場合は、行を挿入してください。

### 3 サービス評価の実施と活用状況

サービス評価の振り返りでは、今回の事業所の取り組み状況について振り返ります。「目標達成計画」を作成した時点で記入します。

【サービス評価の実施と活かし方についての振り返り】		取 り 組 ん だ 内 容	
実施段階		( ↓ 該当するものすべてに○印 )	
1	サービス評価の事前準備	<input type="radio"/>	① 運営者、管理者、職員でサービス評価の意義について話し合った
		<input type="radio"/>	② 利用者へサービス評価について説明した
		<input type="radio"/>	③ 利用者家族へサービス評価や家族アンケートのねらいを説明し、協力をお願いした
		<input type="radio"/>	④ 運営推進会議でサービス評価の説明とともに、どのように評価機関を選択したか、について報告した
		<input type="radio"/>	⑤ その他( )
2	自己評価の実施	<input type="radio"/>	① 自己評価を職員全員が実施した
		<input type="radio"/>	② 前回のサービス評価で掲げた目標の達成状況について、職員全員で話し合った
		<input type="radio"/>	③ 自己評価結果をもとに職員全員で事業所の現状と次のステップに向けた具体的な目標について話し合った
		<input type="radio"/>	④ 評価項目を通じて自分たちのめざす良質なケアサービスについて話し合い、意識統一を図った
		<input type="radio"/>	⑤ その他( )
3	外部評価(訪問調査当日)	<input type="radio"/>	① 普段の現場の具体を見てもらったり、ヒアリングで日頃の実践内容を聞いてもらった
		<input type="radio"/>	② 評価項目のねらいをふまえて、評価調査員と率直に意見交換ができた
		<input type="radio"/>	③ 対話から、事業所の努力・工夫しているところを確認したり、次のステップに向けた努力目標等の気づきを得た
		<input type="radio"/>	④ その他( )
4	評価結果(自己評価、外部評価)の公開	<input type="radio"/>	① 運営者、職員全員で外部評価の結果について話し合った
		<input type="radio"/>	② 利用者家族に評価結果を報告し、その内容について話し合った
		<input type="radio"/>	③ 市区町村へ評価結果を提出し、現場の状況を話し合った
		<input type="radio"/>	④ 運営推進会議で評価結果を報告し、その内容について話し合った
		<input type="radio"/>	⑤ その他( )
5	サービス評価の活用	<input type="radio"/>	① 職員全員で次のステップに向けた目標を話し合い、「目標達成計画」を作成した
		<input type="radio"/>	② 「目標達成計画」を利用者、利用者家族や運営推進会議で説明し、協力やモニター依頼した(する)
		<input type="radio"/>	③ 「目標達成計画」を市町村へ説明、提出した(する)
		<input type="radio"/>	④ 「目標達成計画」に則り、目標をめざして取り組んだ(取り組む)
		<input type="radio"/>	⑤ その他( )